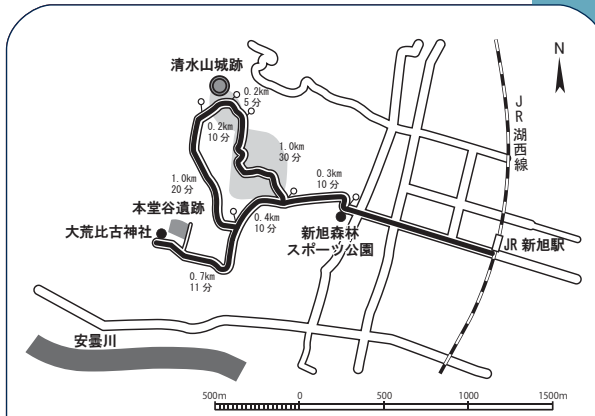


清水山城館跡

－山城を楽しむ－



アクセスマップ

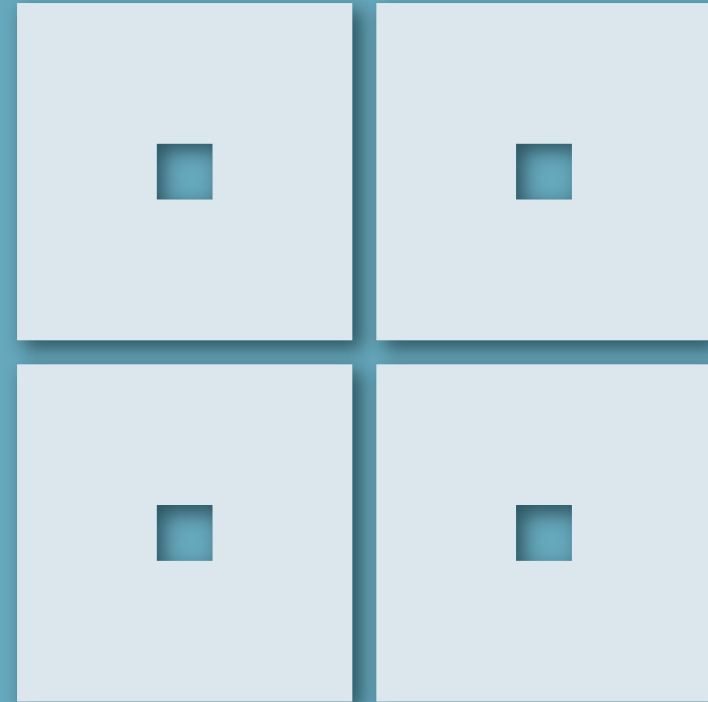
JR 湖西線 新旭駅から西へ徒歩 15 分で、
登山口（新旭森林スポーツ公園）に到着。
山城へは公園から徒歩 40 分。

清水山城跡へ登城されるみなさんへ

清水山城館跡は、個人や高島市が所有する城跡です。ゴミは各自で持ち帰り、山では火を使用しないなど、文化財の保全に御協力ください。また、十分な装備を持って登山し、事故のないよう安全に努めてください。

埋蔵文化財活用ブックレット8（近江の城郭3）
清水山城館跡

刊 行：平成23年9月12日
編 集：滋賀県教育委員会・高島市教育委員会
制作・刊行：滋賀県教育委員会事務局文化財保護課
住 所：〒520-8577 大津市京町四丁目1番1号
電 話：077(528)4674・FAX:077(528)4956
e-mail: ma07@pref.shiga.lg.jp
印 刷：近江印刷株式会社



目次

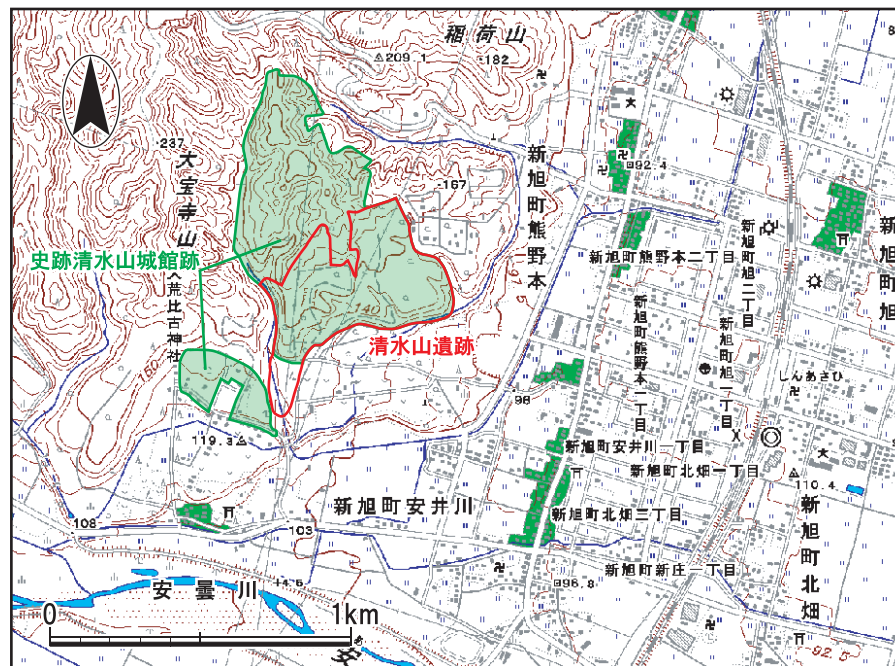
1. 清水山城館跡	1
2. 清水山城	4
●主郭	5
●主郭の発掘調査	6
●南東尾根曲輪群	8
●南西尾根曲輪群	9
●北西尾根曲輪群	9
3. 清水山屋敷地	
●西屋敷(加賀殿)	10
●東屋敷(越中殿)	11
●地蔵谷・地蔵山	12
4. 御屋敷・犬馬場	13
5. 本堂谷遺跡(井ノ口館)	15
6. 清水山城下	18
●今市(佐々木越中氏が立てた町場)	18
●平井(武家屋敷跡)	20
●安養寺(佐々木氏と運命を共にする住人)	21
●川原市(佐々木氏直属の職人集団)	21
7. 清水山城と佐々木越中氏	22
8. 佐々木越中氏と西佐々木一族	23
9. 佐々木氏の祭 ～七川祭と竹馬祭～	
●七川祭	25
●竹馬祭	27
10. 清水山城の花々	28
11. 清水山城を楽しみながら守り伝える	28

本埋蔵文化財活用ブックレットは、高島市教育委員会と滋賀県教育委員会が協働して原稿を作成し、滋賀県教育委員会が国庫補助金(史跡等及び埋蔵文化財公開活用事業費)を受けて刊行した。

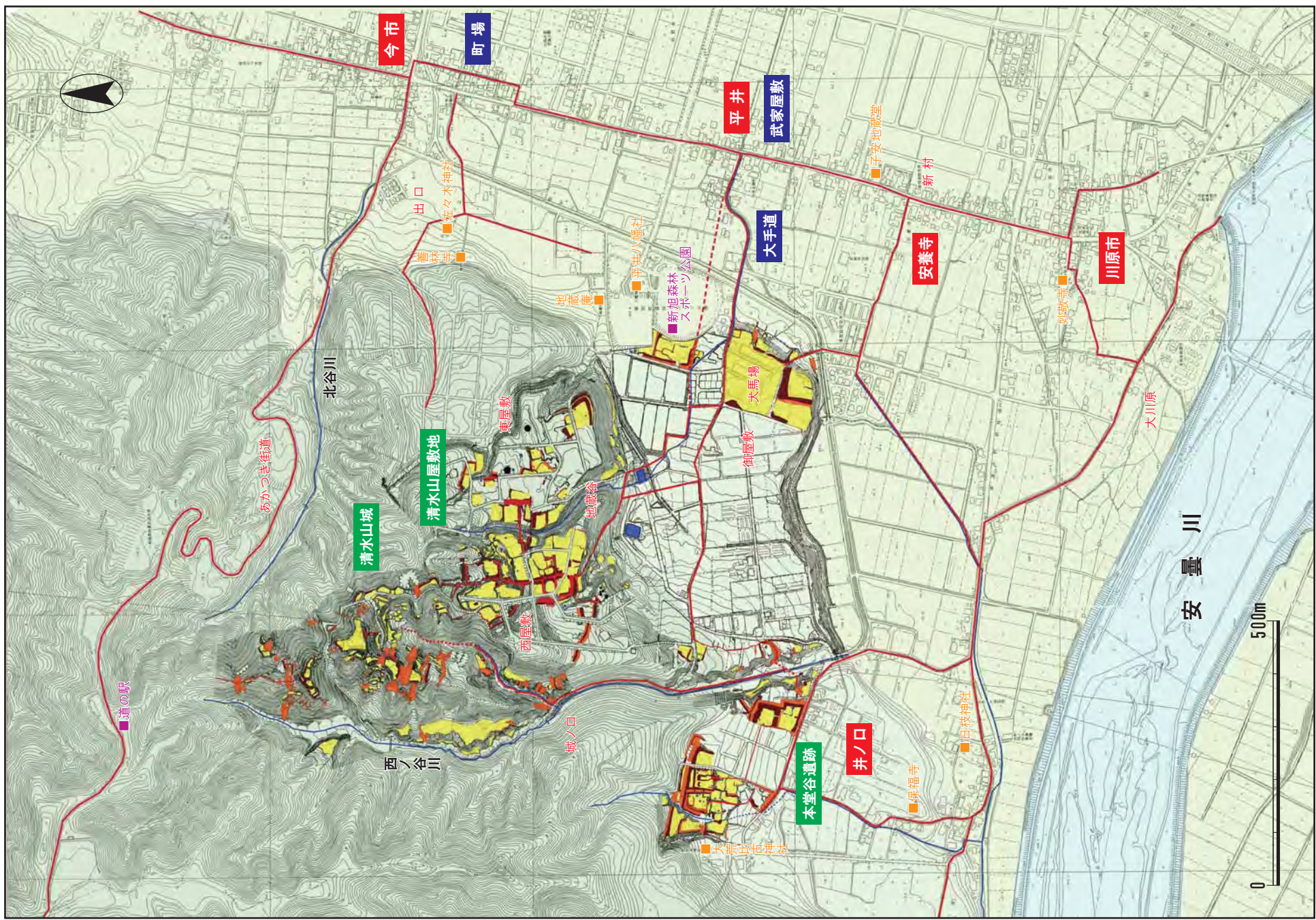
1. 清水山城館跡

清水山城館跡は、琵琶湖西岸の高島市新旭町熊野本・安井川にあります。13世紀頃から高島地域を支配したのが、高島七頭と称される近江源氏佐々木氏の一族で、その惣領家、佐々木越中氏の居城が清水山城です。『信長公記』には、元亀4年(1573)に織田信長が浅井朝倉連合軍との攻防で高島郡の木戸城と田中城を攻撃したと記されていて、この木戸城に想定されているのが清水山城跡です。

饗庭野台地の南東部にあるこの城は、主郭を中心に三方向に曲輪を配置する放射状連郭式の山城で、山麓には家臣団等の屋敷地も残っています。保存状態が良く、我が国の中世の在地豪族の城館を考える上で重要であることから、平成16年に国の史跡に指定されました。



清水山城館跡位置図



清水山城館跡と周辺の概要図

■ 2. 清水山城 ■

清水山城は、地元で、「佐々木城」や「城のテンシ・テンシン」などと呼ばれています。

標高 210mの主郭からは、室町時代に越中氏の領地であった高島本荘・新荘を含めた安曇川流域一帯が望めます。

城は放射状連郭式と呼ばれる構造で、主郭を中心に、南西・南東・北東にのびる尾根上に曲輪が配置されています。その規模や眺望から、佐々木越中氏だけでなく西佐々木一族の詰城として、16世紀後半に対織田信長戦への緊張が高まる中で改修された可能性が指摘されています。



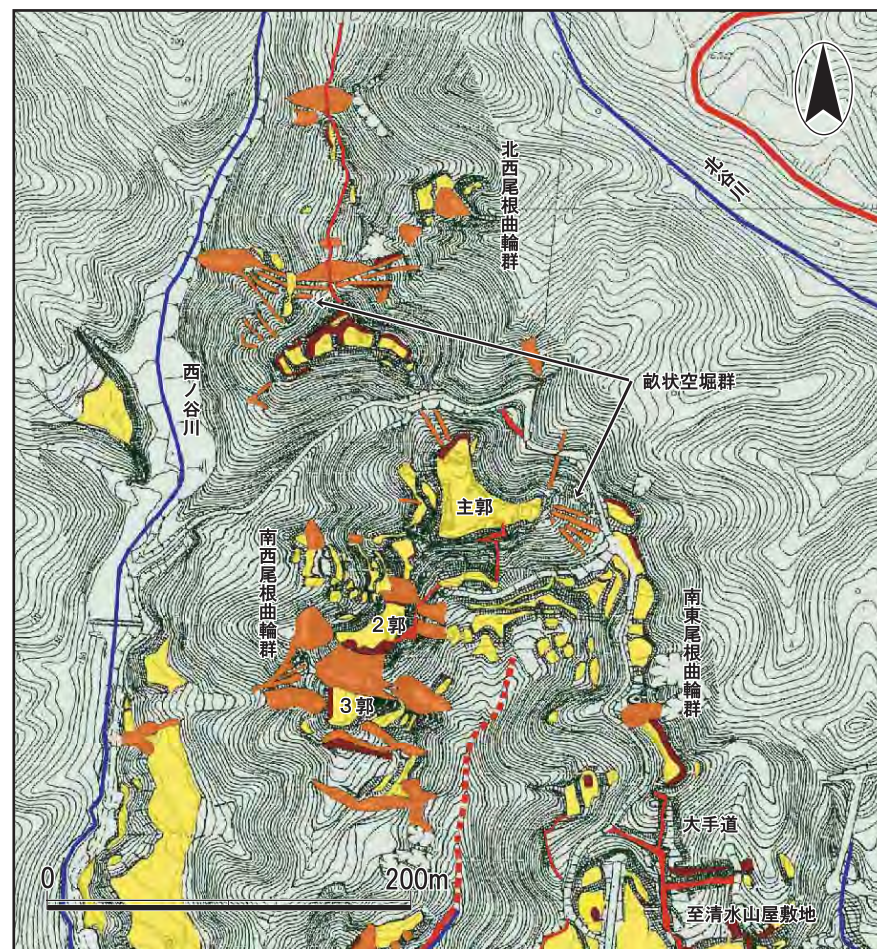
清水山城主郭の畝状空堀群



清水山城主郭からの眺望（安曇川右岸の平野と琵琶湖を望む）

● 主 郭

主郭はL字の形をしていて、東西約 60m、南北約 55mの規模があります。主郭の南面に、本来の登城路と虎口が残り、東斜面には近江ではめずらしい畝状空堀群が築かれています。織田信長との戦いに備えて、朝倉氏によって改修された可能性が推測されています。



清水山城遺構測量図

● 主郭の発掘調査

主郭の発掘調査では、常御殿と推測される石段やかまどを伴う礎石建物跡や礎石建物以前の焼土層などが見つっています。出土した土器は1550～1570年頃のものが多く、礎石建物は、元龜4年（1573）の織田信長の高島郡攻略頃まで機能していたことがうかがえます。

礎石建物は、東西5間×南北5間半もしくは6間の大きさで、南側に破風を見せる妻入りで、切妻あるいは入母屋造の建物と見られます。周囲で瓦が出土していないことから、屋根は檜皮葺きと推測され、建物内部は、南半部を主人の生活空間、北半部をその生活を支える内向きの空間という間取りが復元されます。



主郭出土遺物



主郭礎石建物跡

【主人の生活空間】

上段の間 建物中央の2間×2間の8畳間を主室とし、その北端に、奥行半間の床・棚を構えています。

次の間 主室の南東にある上段の間に次ぐ控えの間です。

納戸 主室の東にあり、寝室として使われた部屋です。



主郭礎石建物復元画

【主人の生活を支える内向きの空間】

台所 建物の西北隅で、かまどの跡が見つっています。かまどを含む2間×3間の空間が、土間の台所と考えられ、その西側には裏口と考えられる石段が残っています。

遠侍 台所の東の2間四方の部屋は、台所との関係から配膳室もしくは従者が控える遠侍と考えられています。



主郭礎石建物復元図

● 礎石建物の柱間寸法 ●

清水山城主郭礎石建物
1間=6尺4寸 (1.939m)
※1尺=30.303cm

戦国時代の礎石建物の柱間は、一乗谷朝倉氏遺跡朝倉館で6尺2寸もしくは6尺2寸5分。小谷城大広間が6尺3寸、観音寺城池田丸建物が6尺5寸、安土城伝前田利家邸奥座敷が6尺5寸であり、北部で6尺3寸以下、南部で6尺5寸という傾向があります。

清水山城はその中間をとる特異な事例です。

● 南東尾根曲輪群

清水山城主郭から南東にのびる尾根上の曲輪群には、清水山屋敷地からの大手道が接続します。この曲輪群は、大手道が接続する曲輪にL字形の土塁と堀切が設けられている程度で、防御性に乏しく、通路的な性格の曲輪群ではないかと考えられています。

平成13年度に尾根の北端の曲輪の発掘調査で、礎石建物跡が見つっています。

礎石建物の規模や構造は明らかにできませんでしたが、礎石には五輪塔の石材を転用しています。特に琵琶湖側の縁の礎石には水輪の丸い石を転用するなどの装飾性も見られます。

この礎石建物が見つかった曲輪は、主郭直下の曲輪という立地面や屋敷地から通じる尾根道の最終防御施設（番所）としての性格が推定されます。

一方で、この地点では琵琶湖・竹生島を一望することができることから、この建物は、後世の山里丸に見られるような庭園建築風な一面も指摘されています。



南東尾根曲輪と大手道接道部



南東尾根堀切



南東尾根曲輪礎石建物跡

● 南西尾根曲輪群

主郭から南西にのびる尾根上に、主郭に次ぐ規模の曲輪の2郭と3郭が並んでいます。それぞれの曲輪は、堀切で遮断され、特に2郭と3郭の堀切は、滋賀県内最大級の規模を誇ります。

一方、2郭と3郭の比高差は大きく、3郭は、2郭に増設した曲輪ではないかと推測されています。また、3郭の南側の尾根筋には、2本の堀切が設けられていて、最南端の備えとしています。



主郭と南西尾根曲輪群を隔てる堀切



南西尾根曲輪群2郭と3郭を隔てる堀切

● 北西尾根曲輪群

北西尾根上の曲輪群は、高所となる搦め手（饗庭野方面）からの攻撃に備えるために厳重に防御されています。特に、階段状に設けられた曲輪の縁には、湾曲した土塁が北側にめぐらされ、ここでも畝状空堀群が設けられているほか、武者隠しなどの遺構も見ることができます。北側の尾根筋には、大規模な堀切を設け、最北端の備えとしています。



北西尾根畝状空堀群

■ 3. 清水山屋敷地 ■

● 西屋敷（加賀殿）

西屋敷は、清水山城の南側の山腹に位置しています。一帯は「加賀殿」の地名が残り、中央には「大手」の地名とともに、大手道が直線的にのびています。大手道は「大門」と呼ばれる地点で屈曲し、急な斜面を斜めに下っています。

この大手道に面して、井戸を備えた方形の曲輪が配置されています。また、大手道から派生する小路もあり、大手道や小路に面して土塁を設けています。一帯には、かつて天台寺院の清水寺があったとされ、その存在がこれらの遺構の特徴からもうかがえます。

また、南西端には中世墓があり、大規模な土塁と堀が巡っています。清水山城と屋敷を防御する惣構、もしくは清水寺の結界としての性格が考えられています。

西屋敷の曲輪の発掘調査によって、規模や構造は不明ですが、16世紀前半の土器とともに、礎石建物跡が見つかっています。



西屋敷 大手道



西屋敷 礎石建物跡



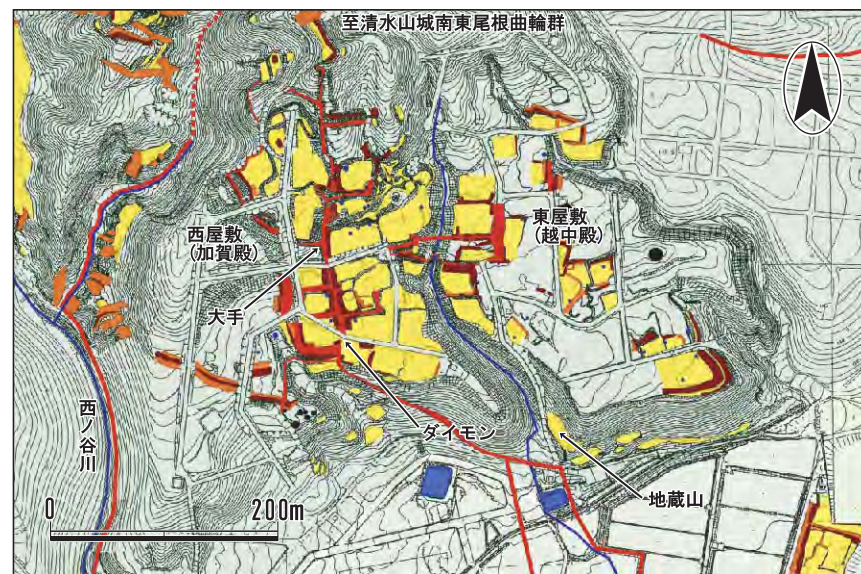
西屋敷 土塁

● 東屋敷（越中殿）

東屋敷は、西屋敷とは「地藏谷」と呼ばれる谷を隔てて、位置していて、「越中殿」の地名が残っています。

南東端には大規模な土塁が築かれていて、東屋敷や清水寺の結界と考えられています。

東屋敷の遺構は、地藏谷に面した西側は、西屋敷と同様に曲輪群が規則的に並び、道路に面して土塁を築いているのに対し、中央部から東側にかけては、不規則に並ぶことから、のちに佐々木越中氏によって屋敷として改修された可能性も指摘されています。



清水山屋敷地遺構測量図

● 清水山城をめぐる伝承 ●

- ・城のテンシには、「蛇松」と呼ばれる木に、からみつく老松があった。
- ・城のテンシでは、正月の朝に金のにわとりが鳴く。
- ・清水山城の日当たりのよい松の木の根元に、黄金が埋蔵されている。
- ・この黄金は、本堂谷遺跡（井ノ口館）に埋め直された。
- ・平井の墓地と城ノ谷からシロノテンシにいたる地下道がある。
- ・西ノ谷からの抜け道がある。

佐々木越中氏と清水寺の関係をj知る上で興味深い資料が残っています。文安4年(1447)に佐々木越中氏の家臣(若党)であった八田氏と多胡氏が、河内宮神主とともに清水寺に狼藉をはたらき、半年間、清水寺を占拠しています。



東屋敷 土塁

清水山屋敷地の遺構の特徴からも、15世紀後半頃から清水寺の衰退や縮小に伴って、佐々木越中氏が清水寺の坊院跡に大きな改変は加えずに徐々に進出し、一族や家臣の屋敷にしていたのではないかと推測されています。

● 地蔵谷・地蔵山

地蔵谷は、西屋敷と東屋敷を隔てる谷で、東屋敷の南端の一角が「地蔵山」と呼ばれています。かつて、西屋敷も含めた一帯には、かなりの数の阿弥陀石仏や五輪塔が散在していたそうです。現在、安養寺区によって、約400体の石仏が地蔵山に集められ、安置されています。



地蔵山 阿弥陀石仏

現在、平井区の墓地に四面石仏が安置されていますが、もとは地蔵谷にあったとされています。正面には阿弥陀如来、背面には薬師如来、左側面には観音菩薩、右側面には勢至菩薩が彫られています。天文年間(1532~1555)の造立と推測されています。



平井区 四面石仏

■ 4. 御屋敷・犬馬場 ■

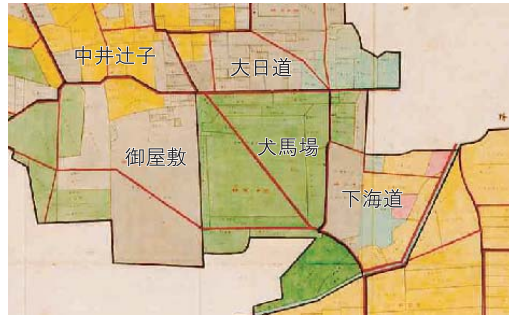
清水山屋敷地の南下の段丘の南東端の縁辺部には、「犬馬場」の地名が残っています。明治6年の地籍図には、一町四方(約100m四方)の方形の区画が見られます。

現在、この区画の北東隅に大將軍社が鎮座しています。祭神は少名彦命で、佐々木氏の家来、栗原大和守によって建てられたと伝えられています。



大將軍社

犬馬場は、「犬追物」の行事を開催した馬場のことをいい、館の正面または周辺に作られたとされています。また、犬馬場の西隣の地名は、「御屋敷」で、地元の話によると、かつてここにも土塁や堀があったといわれています。



明治6年 安養寺村地券取調総絵図

犬馬場の方形の区画は、御屋敷の佐々木越中氏の館にともなう犬馬場であったと推測されています。越中氏居館・犬馬場は、清水山城主郭に常御殿が建設される17世紀前半以前の居館と推測されています。全国的に犬馬場は、城の大手口に設けられることが多いことから、犬馬場の北辺の道が、大手道であったと推測されます。大手道は、北国街道に接続し、武家屋敷のあった平井集落から犬馬場、そして、「中井辻子」の地名が残るエリアを通過して西屋敷にいたるルートが推定されています。

この段丘上には、方形区画が、犬馬場の周辺の「下海道」の地名が残るエリアや段丘の東辺の「大日道（堂）」「御坊山」の地名が残るエリアにも残っています。「大日道」の発掘調査では、16世紀前半の土器とともに、礎石建物跡や区画溝が見つかっています。また、周辺には13世紀末に佐々木綱時

●犬追物●

犬追物は、中世の武士がたしなだ武術の一つで、流鏑馬・笠懸とならぶ馬上での弓術で、動く犬を標的にしました。少なくとも150匹の犬を投入し、所定の時間内に12騎の騎手が何匹射たかで勝敗を争います。実際に犬を打ちぬくことではなく「犬射引目(いぬうちひきめ)」という特殊な鎗矢を使用しました。

準備には多大な費用を必要としましたが、見物にはたくさんの人が訪れ、見物料(棧敷料)がとられました。

また、犬追物に参加した武士は、傷ついた犬を「調齋」し「喫」(=食)しました。

の妻によって開かれたという由緒がある地蔵庵があります。これらのことから段丘の東辺一帯には、西佐々木一族や家臣の宿所・出屋敷もしくは越中氏と関連の深い寺院があったことが推測されています。

■ 5. 本堂谷遺跡（井ノ口館） ■

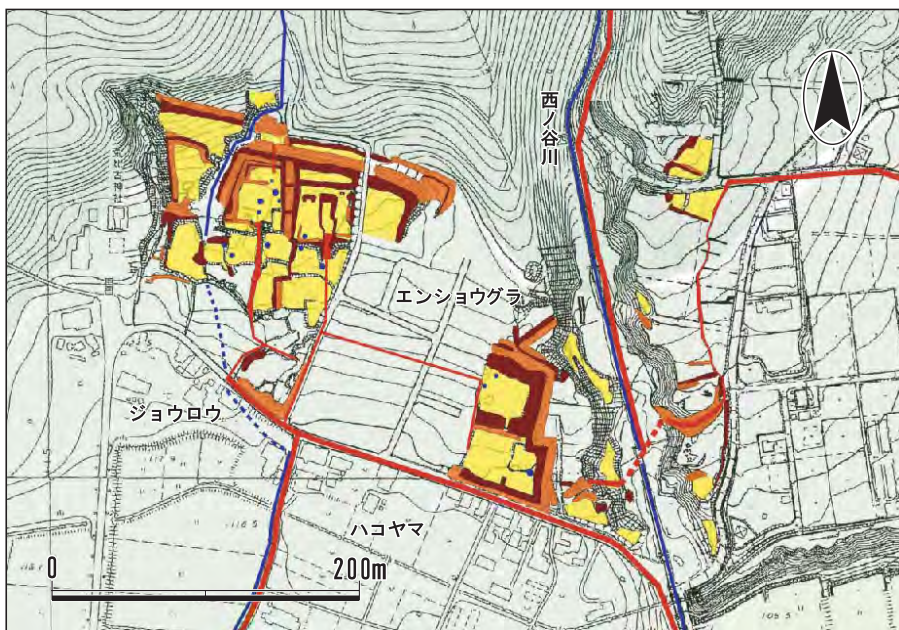
本堂谷遺跡（井ノ口館）は、清水山城・屋敷地および犬馬場・御屋敷の段丘と西ノ谷川を隔てた西側の大宝山の中腹のゆるやかな斜面に立地します。西側は、佐々木氏の氏神を祀る大荒比古神社と隣接しています。遺構は、清水山屋敷地と同じような土塁と堀で囲まれた曲輪群が残っています。しかし、遺跡の立地による防御性によるものか、こちらの土塁や堀は、規模が大きいことが特徴としてあげられます。



本堂谷遺跡



本堂谷遺跡 堀



本堂谷遺跡（井ノ口館）遺構平面図

また、本堂谷遺跡の遺構は、清水山屋敷地と同様、かつてこの地にあった大宝寺の坊院跡を利用していることも指摘されています。遺跡内には、「ジョウロウグチ」や「エンショウグラ」の地名が残っています。「ジョウロウ（上臈）」は身分の高い僧侶を示していて、寺院としての性格がうかがえます。しかし、遺跡の中央部が、残念ながら、平成5年に宅造工事によって破壊されました。遺跡南



本堂谷遺跡 土橋

辺の道をはさんで遺跡の南側一帯は「ハコヤマ」の地名が残っています。地元の方の話によると、かつて、ここにも土塁や堀で仕切られた曲輪群が残っていたようで、七川祭の「馬駆け」を道の両側の土塁の上から見物したそうです。また、遺跡南辺の道沿いには、佐々木氏が連れてきたとされる谷氏一族が居住していたとされています。



保福寺 釈迦如来坐像

保福寺の本尊釈迦如来坐像は、織田信長の焼き討ちに遭った際に谷氏が持ち出し、保福寺に安置したと言われています。仏像には焼けた痕跡が残り、「焼け残りの釈迦」の異称があります。

これらのことから大宝寺は、信長の来襲まで存続していたこととなります。戦国末期には南から攻めてくる信長軍に対し、越中氏と何らかの共存関係にあった大宝寺が清水山城の出城として機能していたのではないかと考えられています。

■ 6. 清水山城下 ■

清水山城が位置する熊野山（清水山）の山麓には、湖西の主要道である北国街道が縦走しています。清水山城の城下は、大手道が接続する北国街道に沿って南北に広がっていました。

● 今市（佐々木越中氏が立てた町場）

今市は、城下の北端にあたり、北国街道と熊野山を越えて若狭へ通じる「あかつき街道」との交差点の南側に位置しています。明治6年の地籍図をみると、北国街道が人為的に屈曲され、その間に短冊型の地割が並んでいて、町屋が立ち並ぶ様子がうかがえます。



佐々木神社本殿 祭神は少名彦命



明治6年 今市村地券取調総絵図

集落には、清水山城との関わりを物語る伝承や行事（竹馬祭）が残っています。また、清水山城の東麓に位置する佐々木神社と善林寺は、清水山城の出城であったと伝えられ、ここから東屋敷に通じる裏道的な登城路があったといわれています。周辺の「出口」という地名は登城路の出口であることに由来するとされています。

このような今市と清水山城との関連や地名などから、「今市」は、清水山城主佐々木越中氏によって新しく立てられた市場ではないかと推測されています。

織田信長の高島郡制圧後に甥の信澄によって、大溝城が築かれます。

その城下町には新庄町・南市町・今市町の名が見られることから城下町がつくられるにあたって、高島郡内の町場が移転したことがうかがえます。今市町は、清水山城下の町場の今市であり、今市は戦国時代末には大溝城下町に招来されるほど、発展した町場になっていたと考えられています。



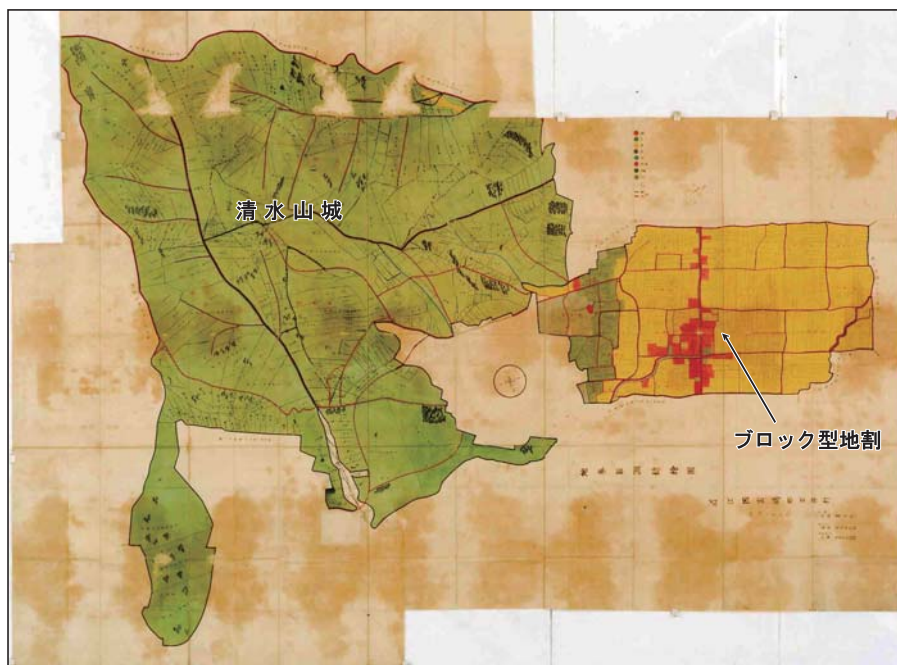
善林寺



善林寺 本尊 千手観音立像

● 平井（武家屋敷跡）

平井は、今市の南に位置し、北国街道と清水山城とにいたる大手道が接続する地点にあたります。また、清水山城が立地する広大な山林の大部分を所有していました。集落には、佐々木越中氏の家臣、八田氏が居住していたとする伝承も残っています。現在、新旭森林スポーツ公園の中に鎮座する八幡神社は、かつて、清水山城の鬼門にあたる「八幡尾」にあったとされ、のちに現在地に移設されたと伝えられています。明治6年の地籍図によると、ブロック型の地割が北国街道とこれに直交する大手道に沿ってみられ、佐々木越中氏の家臣の屋敷が、存在していたと推測されています。



明治6年 平井村地券取調総絵図

● 安養寺（佐々木氏と運命を共にする住人）

安養寺は、平井の南に位置しています。言い伝えによると、かつて集落は地蔵谷にあったと伝えられ、織田信長の来襲の時に、集落内の「新村」の地に移転したとされています。また、「新村」より南の安養寺住人と川原市の住人が、清水山城の籠城戦に際し、兵糧米を城にあげたという伝承が残っています。このことから非常時に佐々木越中氏と運命を共にする住人がいたことがうかがえます。

● 川原市（佐々木氏直属の職人集団）

川原市は、北国街道が安曇川を渡る渡河点にあたる、河川交通と陸上交通の結節点に位置しています。川原市は、佐々木氏との関係が古くから推定され、佐々木氏が建立したと伝えられる妙敬寺には、佐々木高信の墓と伝えられる石造物があります。さらに、大荒比古神社の例祭である七川祭における「神御供の式」では、佐々木氏おほかえの鍛冶の子孫と伝えられる「河原市鍛冶」の岡田一党が正座し、他の集落とは異なる特別な扱いを受けています。

これらのことから川原市は、鎌倉時代より佐々木氏と密接な関係にあり、佐々木氏直属の職人集団が存在したことがうかがえます。



七川祭「神御供の式」

■ 7. 清水山城と佐々木越中氏 ■

清水山城の城主は、佐々木高信を祖とする西佐々木一族の本家である佐々木越中氏です。高信の孫である泰氏が「越中守」に任命され、それ以降、代々「越中守」に任命されたことから、「佐々木越中」もしくは「越中」を家名にするようになったといわれています。「佐々木越中」の名が初めて文書に見られるのは、康永元年(1342)「佐々木越中孫四郎」からです。佐々木越中氏は、この後も「四郎」を通称とし、名前には、先祖の高信・泰信の「高」もしくは「泰」の字を一字含み、「越中守」に任官しています。

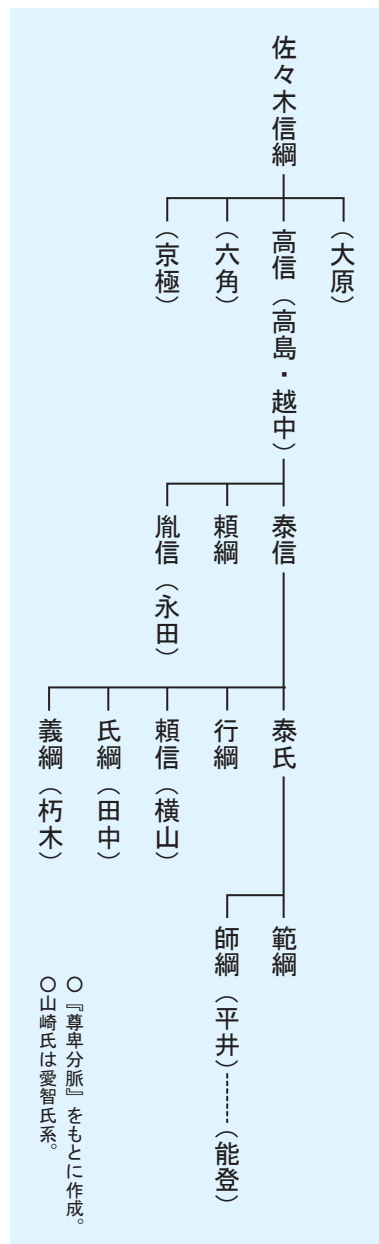
佐々木越中氏は、鎌倉時代には、高島郡の田中郷や高島本荘の地頭職にあり、室町時代になると、高島新荘の地頭職や地頭代官になっています。

● 高島本荘と高島新荘 ●

安曇川南岸部には高島本荘、北岸部には高島新荘が立地していました。高島荘は、鎌倉時代後期には、すでに本荘と新荘に分かれていたと考えられています。

時代は下り、天正11年(1583)の『杉原家次知行目録』には、井ノ口・安養寺・平井・川原市・北畑・堀川・新庄・太田・藁園が「新庄十郷」として記されています。

この「新庄」も高島新荘のことと考えられます。



「西佐々木」略系図

■ 8. 佐々木越中氏と西佐々木一族 ■

鎌倉時代に、佐々木信綱の二男高信が高島郡田中郷の地頭になり、その子孫は、鎌倉時代から戦国時代にかけて高島郡で活躍します。鎌倉時代末から室町時代の前期にかけて、本家の佐々木越中氏が、高島(新・本)荘に拠点を持ち、「越中守」という官職を家名にしたのに対し、他の家々も高島郡内の所領の地名や官職を家名としました。

西佐々木一族は、文安年間(1444~1449)の『文安年中御番帳』によると、室町幕府の外様衆(大名に次ぐ家格)に編成され、奉公衆(将軍の親衛隊)の一員でもありました。

15世紀の中頃になると、一族は、高島郡において、それぞれの領地を支配することが困難になり、西近江の佐々木一族という血縁と高島郡の地縁により結束します。現在、この西佐々木一族である越中・田中・朽木・永田・能登・横山・山崎の七氏は、一般に「高島七頭」と呼ばれていますが、室町時代の史料には、「西佐々木七人」・「西佐々木同名中」・「西佐々木御中」・「七頭」・「高島河上七頭」・「西佐々木面々中」・「七カシラノ衆」・「七佐々木」と記されています。

西佐々木一族は、先の生産基盤の掌握だけでなく、交通路支配も大きな収入源としていました。

● 佐々木越中氏と高島氏 ●

これまで、西佐々木氏の本家は「高島氏」と認識されていました。しかし、鎌倉から南北朝期にかけて、本家は「高島氏」と呼ばれていた可能性はありますが、室町時代の史料では、本家を「佐々木越中」氏あるいは「越中」氏と記しています。また、永享年間(15世紀前半)の史料には「佐々木越中」氏とは別に、「高島」氏の名が見られます。

佐々木越中氏は、外様衆(大名に次ぐ家格)であるのに対し、高島氏は、それより家格の低い番衆に編成されています。また、「佐々木越中」氏は、本家のみに使われていて、高島氏は「越中守」を名乗っていません。

これらのことから「高島氏」は、佐々木越中氏の庶流ではないかと推測されています。西佐々木氏の本家が、高島氏という言説は、明暦2年(1656)に刊行された『江源武鑑』が最初と考えられています。

佐々木越中氏は、安曇川左岸の清水山城下に形成された今市・川原市を、安曇川右岸は北から五番領＝山崎氏、南市＝田中氏、三尾里（石橋）＝能登氏、音羽庄＝永田氏と北国街道上にそれぞれ所領が認められます。

また、佐々木越中氏は、15世紀の終わり頃から積極的に交通・流通支配に乗り出していたことがうかがえます。

明応7年（1498）佐々木越中氏は、若狭小浜から近江高島南市間を結ぶ九里半街道沿いの「保坂」に新関の設置を試みますが、南北五ヶ商人の訴えで失敗に終わります。また、朽木・能登・横山各氏も新関の設置を試みますが失敗し、結局、永正15年（1518）に「七頭之面々」によって、「北近江

●佐々木一族の所領●

【家名】	【所領（現在地）】
越中氏(越中守)	高島本荘・高島新荘 （安曇川町青柳一帯・新旭町南部）
能登氏(能登守)	安曇河御厨（安曇川町船木）
田中氏	田中郷（安曇川町田中）
朽木氏	朽木荘（朽木）
横山氏	横山郷（武曾横山）
永田氏	音羽荘（音羽・永田）
山崎氏	宮野郷（宮野）・五番領（安曇川町五番領）？

関所十二ヶ所」が設置されました。

16世紀になると西佐々木一族の中で、越中氏・田中氏・朽木氏が台頭し、天文年間（16世紀中頃）には越中・田中氏は六角氏方へ、朽木氏は將軍方へ分かれていきます。『足利季世記』は、越中・田中両氏を六角氏の「両客」と記しています。

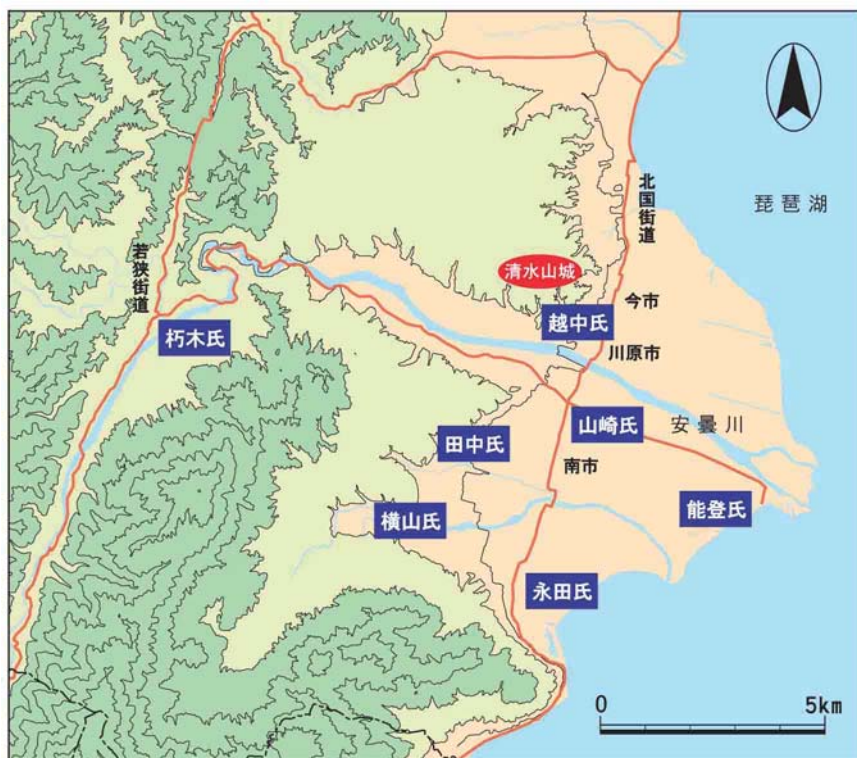
■ 9. 佐々木氏の祭 ～七川祭と竹馬祭～ ■

● 七川祭

七川祭は、高島市新旭町安井川に鎮座する大荒比古神社の例祭です。大荒比古神社は、豊城入彦命と大荒田別命を祀り、清水山城主・佐々木氏の氏神である少名彦命、仁徳天皇、宇多天皇、敦実親王の四座も合祀されて



七川祭 流鎧馬

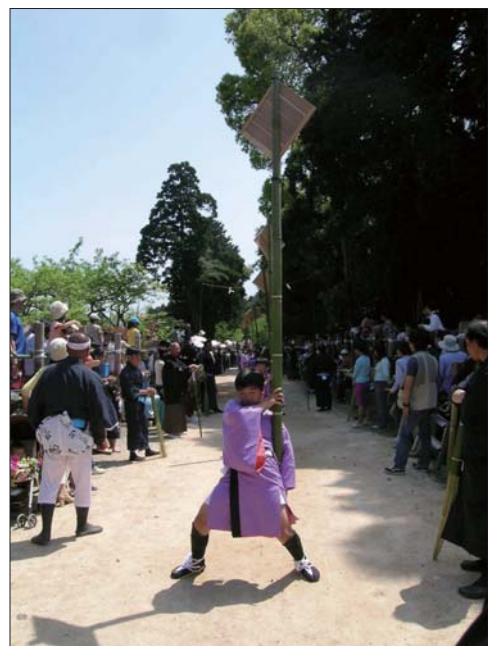


佐々木一族の所領と清水山城位置図

います。祭りは、西佐々木氏の祖佐々木高信が出陣の時に、必ず大荒比古神社に武運を祈願し、戦勝の時に、12頭の流鏝馬と12基の的を献納したのが始まりとされ、毎年5月4日に、奴振・競馬（流鏝馬）・神輿渡御などが奉納されます。



七川祭 傘鉾



七川祭 奴振

このうち、流鏝馬の的を練って歩く「奴振」は、滋賀県選択無形民俗文化財に選ばれています。8つの氏子のうち、6つの氏子が左手での的を持つのに対し、宮元である「井ノ口」と新庄城のあった「新庄」は、刀を指すことを許されたため、刀の邪魔にならないよう的を右手に持って練ります。また、傘鉾の色も、6つの氏子が赤色であるのに対し、井ノ口と新庄は白色の傘鉾を持ちます。

● 竹馬祭

竹馬祭は、高島市新旭町熊野本（今市）に鎮座し、少名彦命を祀っている佐々木神社の例祭です。毎年5月3日に行われるこの祭りは、子どもが竹馬にまたがり、流鏝馬の神事などを奉納する子どもが主役の祭りであり、高島市指定文化財です。

集落には、祭りのルーツを知ることができる話が残っています。織田信長との大津方面（坂本もしくは堅田辺りの合戦か。）の戦いにあたり、清水山城から男達が、もし戦いに敗れたら「打下」から「のろし」をあげるといって出陣した。残された女・子どもたちは、清水山城にまだ、兵が残っているように見せかけるため竹馬にまたがってぐるぐるまわった。これが竹馬祭の始まりとされています。



竹馬祭 竹馬



竹馬祭 扇の手の儀

しかし、偶然「打下」で山火事があり、女は戦に負けた合図の「のろし」と勘違いし、清水山城に放火しました。戦いに勝って帰ってきた男たちは、焼けた清水山城を見て愕然としたと伝えられています。

10. 清水山城の花々

清水山城では、城の曲輪や堀切などの遺構を巡りながら、四季折々の花々も楽しめます。城跡、自然、そして山からの眺望。人それぞれの楽しみかたができること。それも、清水山城の魅力のひとつです。

清水山城の春の花木



ヤマツバキ(ツバキ科) 2~4月



ミツバツツジ(ツツジ科) 4月



オオイワカガミ(イワウメ科) 4月



フジノキ(マメ科) 5~6月

11. 清水山城を楽しみながら守り伝える

高島市には地域の歴史資産を守り伝える活動をする市民団体があります。「戦国山城保全活用グループ清水山城楽クラブ」もそのひとつで、史跡清水山城館跡などの地域資産を適切に未来に継承するため、お互いに学びあい、楽しみながら保全や活用することを目的に活動されています。



清水山城の案内ガイド

体験学習(弓矢体験)

森林保全(間伐材でのテーブル製作)

清水山城城楽クラブの活動

基本的な活動内容は、清水山城館跡での、樹木の整理や下草刈り、落ち葉かきなどの保全活動で、間伐材の利用や落ち葉を使った焼き芋、草木染めなど、様々な楽しみを組み合わせられています。また、城跡案内や城跡体験のイベントなども開催され、史跡の積極的な活用事業にも取り組まれています。



城跡体験(畝状空堀群での攻防体験)

のろし駅伝参加



落ち葉を使った焼き芋

竹筒ごはん作り

山野草の天ぷら



間伐材等を使った草木染め

間伐材を使った模擬櫓

- 清水山城楽クラブの活動コンセプト●
- みんな一人一人が主人公
 - 仲間づくりをすすめよう
 - 継続性を念頭に、発展性を視野に
 - 二八蕎麦の旨さ(学習2割・楽しみ8割)
 - お金はかけずに、みんなで知恵を絞り、手間をかける。(材料はできるだけ現地調達)
 - 地域の個性を生かそう
 - 地下遺構は痛めない

●清水山城楽クラブのホームページ●
<http://www.eonet.ne.jp/~joraku-club-hy>
 (ブログ <http://joraku-club-hy.blog.eonet.jp>)
 ※詳しい活動内容やお問い合わせはホームページをご覧ください。



清水山城楽クラブ 佐々木七獣士キャラクター